

## 今月の谷口雅春先生のお言葉

# 親の心の持ち方が子供を勉強好きにする

### これまでの教育の欠陥<sup>けっかん</sup>

今までの教育家のやっておられる教育法をみますと、  
たいていは人間のわるいところを見つけまして、それを  
「ここがわるいから直せ」というふうなことを常に言っ  
てきたのであります。そうして「お前はできがわるい、か  
らよく勉強せよ」こういうふうな調子で教えてきたので  
あります。そうするとその子供はどういうふうになっ  
てゆくかといいますと、「お前ができがわるいから」とこ  
う言われると、言葉の力によりまして、「自分はできが  
わるい」ということを強く強く心の底に印象させられる

のであります。そうして「できがわるいからやれ、やれ」  
と言われますと、「わたしはできがわるいのだ、やらな  
くちゃならない」と思いますが、心の底に、「自分は  
成績がわるいのである、頭がわるいのである、よくでき  
ないのである」という強い信念がその子供の潜在意識に  
強く印象しておりますから、勉強しようと思っても勉強  
に興味が起こらないのであります。それをいやいや「で  
きないできない」と思いながら勉強しましたが、本当に  
その勉強が心に這入らない、そのため、いくら勉強して  
も、その効果があがらないということになるのでありま  
す。これが言葉の力であります。

〔生命の真相〕頭注版第30巻6〜7頁

## 親のまちがった言葉が子供を損なう

多くの子供たちは、親がまちがった心の波を起こし、まちがった言葉の波を起こしているために非常に損なわれているのであります。多くの人たちは、子供を愛するあまりに悪しきことばかりを見つけて、「お前はここがわるいのだ」ということを始終言うのであります。そう言われるとその子供は萎縮してしまいます。そういう子供は、たとい勉強は辛うじてよくできたにしましても、大いに伸びるということはできないのであります。「勉強しろ、勉強しろ」と言わなければ勉強しないから、やむをえず「お前はそんなことではできないから勉強せよ」と言うのだという人があるかもしれませんけれど、も、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖のように言うところから勉強してもかえって心に憶えないのであります。これはまたおかしい現象であります、原理は簡単です。「勉強せよ、勉強せよ」と言うような親は、子供に対してどういふ心の態度をとっているかといいますと、「お

前はできがわるいのだよ」という考えを懐いているのであります。できるに定まっておれば、「勉強せよ」とは申しません。「できがわるい」と信じているから、「勉強しろ、勉強しろ」とこう言うのであります。

〔「生命の真相」頭注版第30巻12〜13頁〕

## 子供を心で縛ってはならない

親または教育者が、心の中で、「この子供はできがわるい」という精神波動を起こしまして、その子供をそういう心で見つめているかぎりには、その子供は決して学習がよくなるものではありません。勉強室にいまして、勉強しているような真似をしておつても、心は親の心で縛られておりますから、勉強が愉快でないのであります。そういう場合には、勉強室に坐っておりまして、なんとなしに窮屈な、縛られたような感じがいたしますので、その窮屈な中にいるのではのびのびと生命が生長しませんから、そこでいくら勉強しても深く心に愉快が刻まれないということがないのであります。そのためにせつかく

勉強しても能率が上がらないのであります。

〔「生命の實相」頭注版第30巻13～14頁〕

「人間は神の子」という自覚を子供に与えること

勉強しないといても、やはり学校で先生に習った時には、本も見、先生の話も聞いているのです。本を見、先生の話もきいているからやはり一度は頭に這入っているのです。ですから、一遍習ったことをいつでも思い出せる状態においたならば、家へ帰っても学習しなければならぬということは必ずしもないのであって、一遍憶えたことを試験の時や入用の時に思い出しさえすれば、それで勉強しなくても百点がとれるということになるのであります。それが、憶い出せない。憶い出せないようにしているものはなんであるかというところ、「人間は忘れっぽいものである」という一つの「まちがいの信念」であります。(中略)「人間は忘れる動物だ」とのまちがいの信念を、いかにして打ち破るかというところ、それには「人間は神の子である、全智全能の神の子であって、全智全

能が自分の頭にあるのだから決して忘れるものではない」という大自覚を人類に与えることが必要なのです。

(中略)常に子供に対して「あなたは神の子ですよ。神の子だから必ず頭がよくて記憶力はよいのですよ」ということを教える。「あなたは神の子だから、本を一遍読んだら決して忘れるものではありません。先生から一遍聴いた話はもう決して忘れやしないのですよ。必要な時には必ず思い出せる」ということを常に言葉の力によって生徒たちの頭に印象するようにするのであります。そして、試験場または実際問題に臨んだ時に、「人間は神の子である」ということを思い出して「自分は神の子だから、必ず憶い出せるのだ。必ずよい考えが浮かんでくるのだ」と、こう心に唱えて、心を落ちつけて、さて問題に対したならば、必ずそこに出されている問題に対する適当な回答が思い出されてくるのであります。人間の能力を発達せしむるには、そういうふうの子供のときから「我は神の子、無量力」の自覚を与えることが肝要であります。

〔「生命の實相」頭注版第30巻32～33頁〕